2013～2014年度　国際ロータリーのテーマ
ロン D.バートン

ロータリーを
実践し

みんなに
豊かな人生を

RI第2510地区 留萌ロータリークラブ

会報

2013►2014
WEEKLY REPORT

留萌ロータリークラブ
会長目標　**集中と調和**

会長／中出敏彦　幹事／大嶋孝広

プログラム

●本日
来賓卓話「塩分の摂取について」
札幌医科大学特任助教授
管理栄養士　三上　奈々 様

●次週予定
移動例会「目の健康アドバイス」

会員誕生日
9月11日　辻本　哲也
9月11日　阿部　洋一
9月14日　清水　陞
9月15日　鈴木　康伸

結婚記念日
9月15日　鵜城　善輝

No. 2572
第9回　9月11日

出席報告

前例会
会員総数……39名
出免会員……8名
出免出席……4名
基準会員出席……20名
出席率……70.58%

前々会　第6回　8月7日
欠席会員……8名
内メイクアップ……1名
修正出席率……81.57%

例会／毎週水曜　12:15～13:15　留萌産業会館2F

会長報告

1．9月2日に第3回定例理事会並びに第2回クラブ協議会を開催し、10月例会プログラムの承認、9月お月見例会の予算案承認、あんどん決算承認しました。また、会計より月次会計報告があり、その承認と例会において報告する件を承認しました。

幹事報告

- 深川ＲＣより会報№2634～2636号、9月例会プログラムを受領しました。
- 芦別ＲＣより会報№2698～2702号を受領しました。
- 国際ロータリー第2530地区と那覇西ＲＣよりリーフレットが届きましたので、回覧します。
- 福島キッズキャンプの礼状と写真、道新の号外が届きました。回覧いたします。

委員会報告

国際奉仕委員会　**燕委員長**

国際ロータリー、ロータリー財団管理委員会より今年度の新たなる恒久基金、大口寄付のご案内が届いておりますのでご紹介いたします。ちなみに大口寄付とは1万ドルでございます。寄付の希望があれば委員会まで申し出ください。よろしくお願いします。

３分間情報

会員研修委員会　　阿部委員長

「ロータリーの友」

ロータリーの友は、ロータリーの地域雑誌です。ロータリアンがロータリーライフを深めるためにも、またクラブがＲＩと直結しているという認識のためにも必要な媒体である、ということをまずご理解いただきたいと思います。

1952～53年度、日本のロータリークラブが東と西に分かれるとき、連絡を緊密に持ちたいという意思を持って1953年１月に発刊され、海外の活動に対する興味を高め、他地区の活動状況を紹介して親睦を図り、ロータリー精神の涵養、ロータリー活動の発展に寄与することを目的としております。

定価は1975年１月号から200円と変わっておりません。1975年というのは、現状50円のはがきが10円、440円のセブンスターが150円、大卒初任給が９万円の時代です。その時代から価格は据え置き、内容については創刊当初より定価の２倍の内容という姿勢を貫いているということです。努力を感じます。隅まで読みたくなりますね。

2012～2013年度実績で1,156,400部発行、月におしなべると約96,000部、月間ゴルフダイジェストが月約60,000部印刷しているそうなので、比較してもお分かりのように、隠れたベストセラーでございます。1986年にカラー化、1990年には頁を３倍にして文字を大きくしています。2003年の50周年のときオールカラーになっております。

進歩を続け、今年の１月に60周年を迎えた、「ロータリーの友」ですが、今年度後半からさらに新しいことを始めようとしています。それは電子版の配信開始、パソコンでロータリーの友を読む取り組みです。

電子版については料金をどうするか、どの様な形式で配布されるのか、不明なことが多くてまだ判断は出来かねますが、情報は随時発信してまいります。

個人的には電子版の方に切り替えたいと思っています。理由は大きく３つ、スマートフォンやタブレット世代としては、冊子を意識して持ち歩かなくても、常に持ち歩いているスマートフォンやダブレットで観る事が出来るようになる事。仕事やプライベートでＰＣを覗いている時間が多い為、合間にも観る事が出来るようになった事。３つめは、狭いのに物で溢れている我が家のスペースをこれ以上侵食しない為です。

これから年末までの間に印刷版と電子版、それぞれの数を連絡することになるのではないかと予想しております。紙でとっておきたいという方もおられるかもしれませんが、電子版を観る環境にある方は、一度考えてみてはいかがでしょうか。

ニコニコBOX

- 本日の卓話、平井さんありがとうございます。　中出会長
- ９月理事会欠席して申し訳ありません。　対馬会員
- あんどん例会反省会ありがとうございました。また、福島キッズキャンプの事でちょっと良い事がありました。　堀会員

前　回	316,000円
今　回	5,000円
累　計	321,000円

プログラム

「我が生い立ち　パート２」

平井　誠治会員

〇激動する昭和初期に、私は生まれ育つ。

私は昭和６年生まれです。その２年前に日本を襲った世界規模の大恐慌(昭和恐慌)で世の中は極度の経済不況となり、企業の倒産も相次ぎ、失業者が増大していた。また、東北・北海道を始めとする各地の凶作もあり、人身売買の日常化、一家離散など、暗くよどんだ空気が国中に漂っていた時代であったようだ。

一方、昭和６年は満州事変が勃発した年でも

あり、以来この国は15年の長きに亘って戦争の歴史を刻んでいく。私は何の因果か、戦争と共に軍歌と共に、人生の第一歩を踏み出す破目になっていた。小学４年生の昭和16年日本は太平洋戦争に突入、そこから完全な軍国主義教育に進み、食料不足・物資不足の窮乏生活に急速に入っていく。

旧制中学２年の時、太平洋戦争が終結。敗戦の日本は、軍国主義から一気に民主主義の時代に変わった。瞬く間に世の中の価値感が一変し、社会の混乱が数年続いた。

〇貧する商店の孫として、質素に、節約に生きる習性、身に着く。

私は祖父と父とで営んでいた小売商店（呉服、太物、化粧品、雑貨）の孫として昭和６年、上川郡比布町で生まれた。その当時、襲った昭和恐慌をまともに受け、経営の不手際もあって借金が重なり、とことん貧した商店に陥っていた。父は近郊の町々に行商に出て日銭を作り、「借金の日掛け返済」に明け暮れる状態がずっと続いた。翌７年、ニシン漁に湧く留萌に漸く定着。父は小さな店を構え、２歳児の私もここで留萌人となった。以来永い間、我が家は借金返済のため切り詰めた生活を余儀なくされ、加えて戦中戦後の物資不足も長く続き、やがて質素に節約に生きる習性が身に着いた。

〇病気続きの人生が情けない。

小学２年生の時、肺炎で２学期をほぼ全休した。幸い進級は出来た。大学３年終了時に結核性リンパ腺炎で長く患い、就職には結核ご法度の時代で、就職を断念。卒業後、幸か不幸か丁度拡大期に向かう衣料品店の家業に就いた。

50歳半ばから成人病の道にはまり、今ではその広がりに苦しめられている。心臓も機械に助けられての有様で、取り付く病名も数多い。病気とは余程縁深い体のようだ。これらのことは誰のせいでもない。自分の責任である。

〇「寡黙は金」の時代に助けられて育つ。

生来無口で、話し下手で、小学生時代はだまりこくってクラスに居座っていた。おとなしいことが品行優秀とみられて先生にも引き上げられ、割の良い小学生だった。「多弁は銀、寡黙は金」の時代が私を助けてくれた。自ら立候補演説をして、クラスの役割を勝ち取る現今とは全く違う時代であった。自分の思いを上手に話せない資質は、その後の人生でいつもハンディを背負っている。

〇戦時下、「銃後の小国民」をつとめる。

昭和16年戦時体制が進み、小学校が国民学校に改称。学生服は国防色の国民服に変わった。食事事情がどんどん悪化し、お米も衣服も配給制となった。やがて主食のお米が不足して白米のご飯を食べるのが「贅沢」になった。「雑穀を混入せよ」との強制法も出た。押麦・高粱・トウモロコシ・ジャガイモ・かぼちゃに加えて、海藻麺まで主食に採り入れられた。ただニシンの焼き魚、ニシンの味噌汁だけは地場だけに、留萌のどこの家庭にも満ち満ちていた。

旧制中学の入学試験は戦時中とあって、口頭試問と体力測定だけであった。口頭試問では、「将来軍人になりたい。」を強調すれば充分だったし、体力測定は通称三角点の山を駆け上がって尾根伝いに歩き遂げれば良いものであった。旧制留萌中学には地元以外の増毛、羽幌、幌糠方面から入学生が加わった。そこで幾人もの出来ぶつに出会い、私は自らの「井の中の蛙」を深く自覚した。

中学１・２年時、授業に「教練」があって、配属将校がサーベルを下げて学生の特訓に当っていた。ゲートルを巻いて、木銃を抱えての教練が常であったが、不動の姿勢や隊列行進、そして命令の復唱など、万事兵隊の卵として身体が記憶することを目標に、まさに軍隊式の特訓だった。動きの遅いものがよく叱られ、反復運動をさせられていた。

その頃敬礼制度があって、路上ですれ違う時の上級生・下級生への敬礼の先順・後順には、時折間違う事もあって苦労した。戦時下、学校での上級生による下級生へのいじめ、制裁は日常化していた。教師がスリッパで生徒の顔面を殴ったり、太鼓のバチで生徒の頭を叩いたりしたが、暴力として問われる事は、決して無かった。上級生に些細な事でケチを付けられ、連帯責任として同級生同士横並びにさせられ、ビン

タし合う制裁は悔しく、仲間の心を大きく傷つけた。

中学２年の８月15日、陛下の玉音放送を聴いたが、ラジオの雑音もひどく、その時正確な事情・事実が解らなかった。私は鈍感な中学生であった。しかし日を置かず、様変わりしていく社会の混乱で、敗戦の実感を強く体感していく事になる。

〇敗戦でしばらく、あてどない学業生活に明け暮れる。

終戦前後、日本は食糧と物資の不足に困窮していたので、学生もまず勤労作業が優先された。勉学は二の次の感があり、その結果、学力不足は募るばかりであった。

中学生の始めの頃、農家に泊まり込んでの授農活動、市内のニシン場加工場での箱打ちなども時間割の中にあって、作業活動はずっと続いた。敗戦直後、旧日本軍の弾丸を港湾内に投棄する作業があった。その時の銃弾入れのブリキ缶が私たちの弁当箱に活用された。軍用品の払い下げで、豚皮の軍靴２、３足がクラスに届いたが、仲間はその抽選で大はしゃぎだった。

敗戦で教育の方針が軍国主義から民主主義に変わっていくが、その変化が激しく、何が何だか訳の判らない日がずっと続いた。教科書はザラ紙で、その上、黒塗りの部分もあった。武道系の教師が学校からいつしか消えていった。ある英語の教師は、１次限目はほとんど休講するぶざまな勤務であったが、その職を失うことはなかった。そのせいか、同期の仲間には英語の弱い学生が多く出た。私もその一人である。

仲間はよれよれになったカーキ色の学校標準服を暫く着ていたが、おしゃれな学生は、黒の詰襟学生服をいち早く着て、ダンディさを見せつけていた。私には縁遠い事であった。

学生のコーヒー族、演劇族が街の喫茶店にたむろしていた。学生の多くが映画はほとんど洋画・舶来音楽に親しんだ。アメリカナイズされていくのに時間は余りかからなかった。

〇民主化による学制改革の渦中にさらされる。

敗戦によって、国の仕組みも一変したが、学制制度も６・３・３制に変わった。新制中学、新制高校となって、就学期間が１年延長された。私たちの１年後組から男女共学となったが、我が同期の仲間は、男女共学を逃した１年違いの不運を悔やんでいた。

実質的に大きな変動ではないが、私は旧制留萌中学５年から新制留萌高校の２年生に編入となった。学年は３クラス編成で、文科系と理科系の進学組、そして就職組に分かれた。私は理科系クラスに在籍したが、進学は文科系の大学だった。思えば、終始焦点が定まらない私の人生の一端がここに出ていた。

〇受験期、運に恵まれる。

国立大学の入試では、学制改革の過渡期とあって、学科の点数より、直接学科とは関係ない「進学適性検査」の点数が優遇された。どうした弾みか、私は進学適性検査の成績で予想外の優位に立てた。目指す学校の門をくぐれたし、４年後の「大学卒業者」という呼称は、その後の社会生活で、自らの実力以上に随分役に立っている。進学受験では中学でも、大学でも私は運に恵まれた。

〇ルーツは近江商人と仙台藩下級武士と聞く。

父方の祖父は、京都の帯問屋の大番頭で、人力車で御用聞きしていたと自慢話していた。言うなら、近江商人として明治の時代に渡道してきた。端正な着物姿にその面影を秘めていた。

母方の祖父は、仙台藩下級武士の末裔と聞く。和寒村の山里で、一般的な米作・畑作と違うリンゴ栽培で身を立てていた。当時リンゴ栽培の北限地で苦労を重ねていた。

〇母方の祖父に魅せられる。

母方の祖父は毎日仕事を終えると毎夜、漢詩を読み書きしていた。小学生時代の私は夏休みに決まってその祖父の家に送られたが、祖父は夜毎、新聞記事の熟読と古新聞への漢詩書きが続いていた。いわば農夫でありながら書に親しみ、孤高に生きる姿に魅せられた。

その祖父の名前は「英馬(えいま)」、息子２人は「孔士(こうし)」、「文王(ぶんのう)」、そして娘であるわたしの母には「きくを」で、稀有な名前が続いていた。私ながらに、その名前を漢詩に連ねて心をときめかしていた。